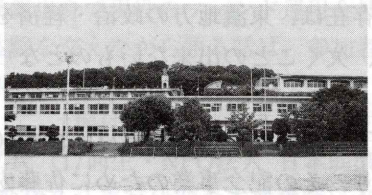
北辰 TOKYO



岐阜県立多治見北高等学校同窓会
東京支部会報　第21号
2007年9月30日

今年も同窓会総会で会いましょう!!

多治見北高等学校同窓会・東京支部　会長　前原 金一（2回生）

多治見北高校同窓会東京支部の皆様には、益々ご清栄のこととお喜び申し上げます。

昨年と同様、副会長、理事、年度幹事の皆様と、会合を重ねて、今年度の総会の準備を進めて参りました。

（1）今年度の総会について

本年も、昨年と同様、昭和女子大学（小生の勤務先）の本部館3階の会議室において、総会及び懇親会を、11月17日（土）に開催することとなりました。お誘い合せの上、多数のご出席をお待ち致します。

母校からは来賓として、小池校長先生他、恩師の先生方、本部同窓会より尾関会長等をお迎えする予定です。幹事年度8・18・28・38回生の皆様には、ご苦労をおかけしておりますがよろしくお願い致します。

（2）懇親ゴルフコンペ開催

今年度第1回懇親ゴルフコンペを3月17日（土）大宮カントリークラブみどりコースにおいて開催致しました。晴天にも恵まれ、大変和やかな1日となりました。次回は10月21(日)、大地秀生氏幹事で、開催の予定です。

（3）岐阜県人会の動向について

愛知前会長から、岐阜県人会の理事、幹事役を引き継ぎましたので、最近の動向についてご報告致します。

昨年の県人会総会は、11月15日（水）都市センターホテルにおいて開催され、約200人の会員が県の銘酒、名産品をいただきながら、和やかに談笑致しました。今年も11月14日（水）18時より、都市センターホテルで開催されますので、是非ご出席下さい。

もう一つの動きは、「第一回在京岐阜サミット」が5月18日に東京岐阜県人会加藤重義幹事長のよびかけによって開催されたことです。このサミットの趣旨は、在京岐阜県立高校の同窓会長達が集まって、①親睦と交友の和を広げ、それぞれの会の活性化と発展に資すること②東京岐阜県人会の活動と相互に協力・協働してその成果を上げ、併せて郷土の発展に寄与すること、とされています。今後は、年2回の開催が計画されています。第一回のサミットには、古田肇岐阜県知事も出席され、活発な話し合いがなされました。

50周年記念事業を成功させ更なる発展を!!

多治見北高等学校同窓会会長　尾関 恵一（2回生）

暑い暑い夏でした。多治見では40.9度の日本最高を記録しました。

多治見が盆地であることから軽いフェーン現象が起こり易い地形によるものと言われたり、盆地のため空気が上下の流れがあるだけで、同じ場所で空気が上下に循環しているためなどと諸説が流れています。

東京支部の皆様はお変わりなく、ますますご清栄のことと存じます。

常日頃同窓会の活動には、色々とご協力をいただき、こころよりお礼を申し上げます。

多治見の街は、この春の選挙で古川雅典君（11回生）が市長となり、山本勝敏君（22回生）が県会議員となり、若返りが計られて、街全体が若返ったような活気を感じています。土岐、瑞浪においても北高出身の議員が誕生

しています。

わが多治見北高の存在は、東濃地方の政治・経済をリードするものとして、欠くことの出来ないものとなっています。

このような状況の下で、わが多治見北高は、開校50周年を迎えることになり、その記念事業のために佐藤宏実行委員長（２回生）を先頭として、わが同窓会は全力を傾注しています。

その活動状況については佐藤実行委員長が別稿で詳しく報告しております。

一年間では、2,150万円で目標の半分にも満たない状況ですので、もう一年間延長すべく県や国税と交渉致します。

この活動は、わが多治見北高同窓会の名誉にかけて何としても達成する必要があります。

この50周年記念事業が母校の後輩たちの為になり、かつわが同窓会自身がこの事業を通じてより広範なかつ強固なものになることを祈っています。

来年11月2日に開校50周年の記念式典を行います。場所、方法など詳しいことが決定されたら、皆様にお知らせします。

今後とも、同窓会発展のため、東京支部の皆様の絶大なるご協力をお願いいたします。

半世紀から一世紀へ

校長　小池 邦夫

多治見北高同窓会東京支部第18回目の総会準備が、前原会長様はじめ幹事の皆様のお骨折りにより、着々と進められているとのこと、感謝申し上げます。

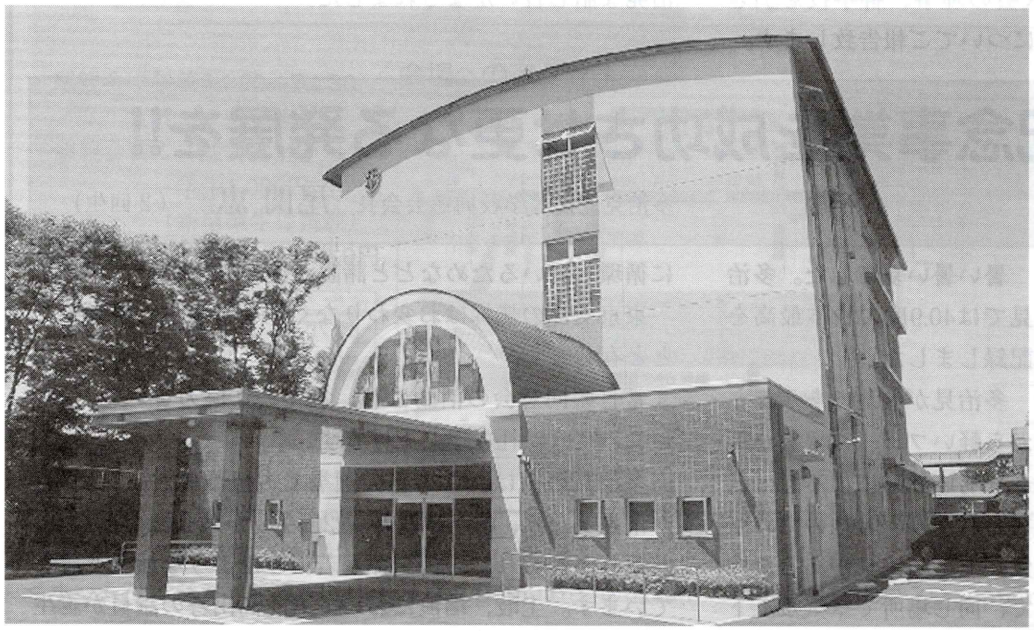
私はこの４月からご退職された勝前校長に代わり多北高の校長を務めている者ですが、多北高が本年度開校以来50年目にあたり、来年度には創立50周年の記念事業が予定されているという学校の節目の時期に勤務させていただけること光栄に思っております。

可児市の中部中学校の卒業生ですので、同級生（多北高では７回生にあたる）の多くが多北高へ通っていて、彼らから色んな学校自慢を聞いておりました。名物用務員の人がいたらしくその存在すら自慢の種のようでした。そのような素晴らしい高校で働けるということと併せて二重の喜びでおります。

さて、学校の様子ですが、教育の内容も、生徒の気質もこの半世紀の間、大きく変わってはおりません。よく言えば、「自主・自律・自学」の精神を尊重し、芸術を愛し、体育を重視する伝統も昔のままです。相変わらず65分授業も続けています。

一方、学校の佇まいはと言えば、10年前のインターハイ開催時に競技会場として体育館が改築、昨年度には本館が改築、さらには北舎も耐震改修と大きく変貌しました。旧本館があった場所は広場となり、生徒の各種の活動にとって格好な場所となっております。今は舗装がしてあるだけですが、来年度にはここに50周年事業で、東西の門をつなぐ北辰の杜と称する緑地帯が整備される予定です。多少広さは狭められますが、伝統校に相応しい雰囲気のある多目的広場が出現しそうです。

皆様も帰郷された折りには是非お立ち寄りいただき、次の半世紀を目指す母校の新しい姿を見ていただきたいと願っています。



新本館棟

人に、まちに元気を！

多治見市長　古川 雅典（11回生）

多治見北高等学校同窓会東京支部の皆様には、益々ご清栄のこととお喜び申し上げます。本年４月30日、第８代多治見市長に就任し、早くも約半年が経過いたしました。

「わかりやすい言葉でわかりやすい市政を」をモットーに、マニフェストに記載した次の７つの重要課題に対する基本政策を掲げ、安心して暮らせる「元気な多治見」の実現に邁進しております。

マニフェスト（７つの基本政策）

①【子育て】将来を担う、子どもたちの教育を充実
②【働く】新たな産業を誘致
③【活性化】陶磁器・タイル産業の活性化
④【住む】主要な道路を整備し、渋滞の解消
⑤【にぎわい】まちなかを元気にして、人が集まる環境づくり
⑥【福祉・市民活動】高齢化に伴う福祉・介護の人材確保の促進
⑦【経営・改革】市役所のあり方を見直し、重要政策をすぐ実行　監査機能の充実

陶磁器・タイルとともに育ってきた多治見市は、現在人口の減少や、産業の低迷などの問題を抱えています。今後多治見市が、多くの人にずっと住みたいと思われるまちであるためには、市が抱える重要問題を解決していくことが必要です。全国的に非常に高いレベルで実践されている情報公開と市民参加等の行政運営を継続しながら、新たな課題に挑戦していきます。

母校、多北の校訓である“自主・自律・自学”は、卒業後も、今を生きる我々の基本理念のひとつであり、生活そのものに根ざす志です。そして、自らを見つけ出していくひとつの道であると思います。ある時、“自主・自律・自学”の延長線上にあるものが、「自己決定・自己責任」であることに気づきました。市長という立場になった今、この「自己決定・自己責任」を市政に反映し、その理念を実現する最大のチャンスが訪れたように思います。

現在、この校訓を心に刻んだたくさんの先輩・後輩の皆様方が、様々な分野において、世界中で、大変なご活躍をされています。その誰もが、多北の恵まれた環境の中で学んだその原点をお忘れではないでしょう。秀逸で温かいネットワークを有機的につなぎ、是非とも思い出深い青春時代を過ごしたふるさとに、皆さんの息を吹き込んで下さい。多治見にゆかりのある人々の心のオアシスとなるよう、そしてここに住む人々に活力を与え続けるために、「人に、まちに元気を！」。（多治見へお越しになるときは、『日本一あつい（暑い・厚い）！』おもてなしをご用意してお待ちしています！）

多治見北高等学校　五十周年記念事業の進行状況について

五十周年記念事業実行委員長　佐藤　宏（２回生）

暑い夏も終わり初秋となりました.東京支部の皆様方におかれましては、ますますご清祥のことと拝察申し上げます。

また、日頃は北高同窓会に種々ご高配を賜り衷心より感謝申し上げます。

さて、五十周年記念行事が具体化されましたのは2006年の10月で、内容は、私達の母校の後輩達が良い環境の中で勉学に励み、社会で活躍できる人に育つよう願いを込めて、構内環境を整備するとの目的で、

①植栽事業　②正門設置事業　③クラブハウス解体および及び新築事業

を計画、そのために5,000万円の事業資金の寄付を募るというものでした。

そして、昨年11月より、募金を開始いたしました。

当初、各学年の募集目標は、１回生から10回生までは200万円以上、11回生から30回生までは100万円以上、31回生から現卒業生までを50万円と設定しました。2006年11月1日から募金を開始し、やがて１年が経とうとしております。

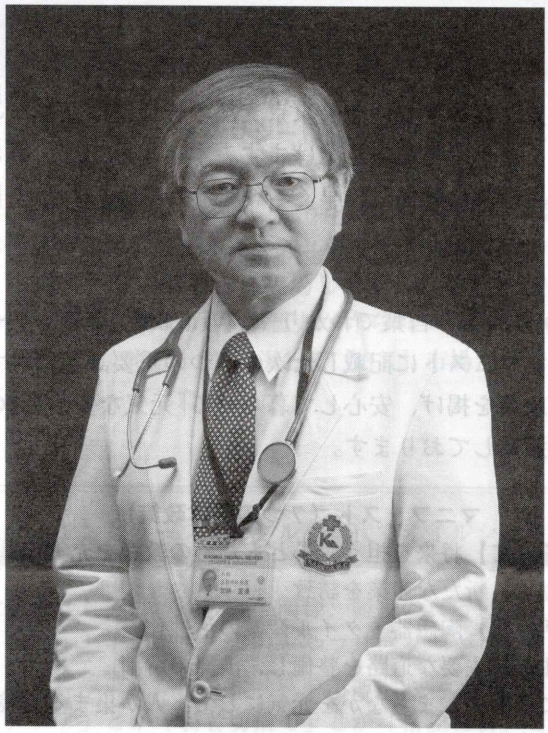
現在、目標金額に達した学年は、１回生、２回生、13回生、19回生です。

寄付者数は800名を越え、総金額は2,100万円強となりましたが、目標金額には、まだ半分まで到達しておりません。

目標金額めざして、同窓生の皆様に呼びかけを続け、来年の11月２日には、全員参加による盛大な記念事業及び、記念式典が成功しますよう、皆様のさらなるご理解とご協力をお願い申し上げます。

エッセイ集「医は仁なり いまだ健在」の刊行

加納 宣康（8回生）



私は1999年２月から、地元の新聞：房日新聞（房州日々新聞の略）にエッセイを書かせて頂いており、すでに９年目に入っています。ここまで続けてこられたのは読者の皆さまと患者さん方の応援のお陰です。ほんとうに感謝申しあげます。

本紙に掲載された原稿をもとに、2002年２月に エッセイ集「いい患者さん、困った患者さん」（新潮社）を出させて頂きましたが、今回、その後のものも含めて、新にエッセイ集を幻冬舎ルネッサンス社から出版させて頂くことができました（2007年６月発刊）。

今回は本全体の構成をほぼ著者の私自身の好みで行わせて頂きました。私の言いたいことをもっとも前面に出したものにしたかったからです。ただし、書名はプロである出版社のご意見に全面的に従いました。私がよいと思う書名はどうも暗いものになってしまうようで、「これでは売れない」という判定がくだるようです。

ちなみに前著は「悩める外科医、患者と共に」というのが、最初に私が新潮社さんに提案した書名でしたが、却下されました。今回もいくつか提案しましたが、いろいろとご指導をいただき、「医は仁なり　いまだ健在」というものになりました。さすがにプロはうまく考えるものですね。私は、いつも悲愴な思いで医療に励んでいるためか、つい重い感じの書名を考えてしまう傾向があります。今回も、私が最初に考えた書名は、「医師になった患者」でした。自分が子どもの時から沢山の病気をして悩んでいるうちに、高校一年生の時にふと「自分が医師になればいいのだ」と思ったことから始まった医師への人生でしたのでこの書名が浮かんだのでした。本書の中では、第一章を「医師になった患者」という見出しにして、幼小児期より病弱であった私がどうして医師になろうとしたのかの過程を私の既往歴と共に紹介しています。

とにかく、1999年２月９日から掲載が始まった本紙の私の エッセイの中から、是非、若い医師や医学生の皆様にこれからも読んで頂きたいと思うものを選んで本書を構成致しました。ほんとうは全エッセイを載せたいところでしたが、そうもいきませんので、いくつかを選んで今回のエッセイ集とさせていただきました。

多治見北高同窓生の皆さまには、是非お読み頂けますようお願い申し上げます。またこれからも力の続くかぎり、房日新聞に エッセイを書きつづけて参る所存ですので、引きつづき叱咤激励の程、お願い申し上げます。なお房日新聞のホームページ
http://www.awa.or.jp/home/bonichi
を開いていただけば最近の10編ずつをご覧戴けます。

ブロンズ像『救援』のこと

岩田 敬子（７回生）

2007年７月19日、東京芝大門にある日本赤十字社本社プラザで、７回生の彫刻家岩田実が制作した「救援のために水を運ぶ婦人像」（ブロンズ106cm台座90cm）が、プロジェクト実行委員会によって寄贈され、日赤関係者10数名、実行委員や協力者20名余りによって贈呈式（除幕式）が行われました。近衛忠煇日本赤十字社社長も出席され、厳粛な雰囲気の中にも実行委員会から像の寄贈目録が渡され、除幕後に社長から実行委員会に対し金色有功賞という日赤に最大級の貢献をした組織に贈られる賞の楯の授与と謝辞がありました。式典の最後には作家も挨拶し、制作時の苦労や像に込めた思いなどを話しました。

このプロジェクト誕生について、新聞（ホームページ「岩田実彫刻の世界」でご覧になれます）記事では触れられていませんが、多治見北高校同窓生のお力によるところ大であります。芸術家が活動の幅を広げていくためにはスポンサーを必要としますが、このプロジェクトを推進する際にも当同窓会長の前原金一氏や岩田実の後援会（芸術活動を支援する会）会長の大嶽節洋氏はじめ７回生の同窓生を中心として、多くの同窓生に発起人や賛同人になっていただきました。呼びかけに応じてご協力下さった方もいらっしゃいます。誠に有難く、この場を借りて、改めてお礼申しあげます。

このプロジェクトは、11月（予定）に等身大（160cm）のブロンズ像（広尾の日本赤十字看護大学の新キャンパスに設置予定）を寄贈することで完遂となります。その塑像

（原型）が間もなく完成しますが、資金集めの方は難渋しております。同窓生の皆様の中に、もしこのプロジェクトに僅かでもご協力したいという方がいらっしゃいましたら、下記あてカンパいただけましたら幸甚に存じます。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

①三菱東京ＵＦＪ銀行本店　普通　０８９９２３８
②東京中央郵便局　１０１６０－６２０７７１１１
口座名はともに
「救援のために水を運ぶ婦人の像」建立プロジェクト実行委員会
詳細のお問い合わせは岩田（TEL＆FAX.0467-25-5329）が承っております。

『最近のITに思うこと』

寄稿“IT自由人”

IT（情報技術）に纏わる研究、情報交換の機会は、AI財団でもIT分科会の下に、ITフォーラム、ITワークショップと言うプログラムが用意されている。ここ暫く数回に亘り、紙面の枠をお借りして、徒然なるままに、幅広くITに関して独断と偏見で、心に浮かんだ事を書かせて頂く事とした。閑話休題、気楽な読み物として一読頂ければ幸いである。

最近、IT業界の仲間と話していたが、この業界で働く人間を『エンタープライズ系』、(以下「エ系」)『非エンタープライズ系』(以下「非エ系」)と便宜上分類することが多い。IT業界は、ご存知のとおり労働の流動性が高い、即ち、転職が他の業種と比較して多い業界である。「エ系」の人間は、ハードウェアベンダー、ERPベンダー、システムインテグレータ、通信機器メーカーなどで働き、この分野での転職組を総称すると定義出来よう。一方、[非エ系]と言うのは、多くの場合、前述のベンダーに就職する事なく、学校を卒業して、ITの世界に入り、Web系、コンテンツ系ミドルソフトウェアなど、新しいベンチャーでの製品開発に従事している人材を指す事が多い。『ベンチャーのCEOである、A氏を知らないか？誰か知っていたら紹介してくれない？』とメールで何人かの友人に依頼すると、『彼は「エ系」でないので、コネクションない』このように使われるのである。

「エ系」と言う呼称は、過去50～40年に亘り、日本における企業、官庁、団体などの業務処理、管理、経営のIT化を担って来たと自負する会社、事実そうであるが、そのような本流を歩いてきたと言うプライドが感じられる。然しながら、最近、[非エ系]の人材が率いるベンチャー企業各社が堂々と「エ系」が主流としている市場に登場して来た。競合状態になった時に、その社のWebサイトで彼らの製品、技術、実績を調べる事が多くなった。概して、彼らの『売り』は、自社のテクノロジー（技術）である。日本にもようやく、テクノロジーに裏付けられた製品を引っさげたベンチャー企業の台頭する時代が到来したと言えるのではなかろうか？　一方、「エ系」はデリバリー（実装能力）を中心としてその存在価値を大きくする。近い将来このような役割分担が一層明確になってくる気がしてならない。

もう一つの時代変革の事例。先般、ITを活用して新しい事業モデルを開発して成長している会社の経営者から聞いた話であるが、この初夏、北海道であるコンファレンスが開催された。ここで議論されたのは、インターネット、Web2.0の新しい技術の情報だったと聞く。そこで発表する日本の若者の多くはせいぜい30歳前後、その殆どが、一流大卒業で、所謂「非エ系」企業に就職した若者だったと聞くが、兎に角、彼らの研究発表は理路整然として素晴らしい内容が多かったと聞く。基調講演するアメリカ人のビッグネームに対しても、講演後の質疑応答には英語での質問も厭わず、議論続出であったと聞く。これを聞いて、新しいIT人材が日本でも育って来たと思わずにはいられない。

さらに、最近所用があり、Web2.0関係での著作、講演多いエバンジェリスト（伝道者）数名にコンタクトを試みた。驚いた事に殆どが、一年の大半を米国で過ごす。新しいテクノロジーに進化する、又はシステム開発の破壊と創造をもたらすような予感のする技術の新潮流を、日本で待つのでなく、より主体的にその変化を体感し、場合によっ

ては、進化、新潮流に関与して行こうとしているのである。彼らの多くは「非エ系」に属する企業の役員、社員なのである。

紙面に限りあるので、そろそろまとめに入りたいと思う。いつの間にか、ITは『３K』市場と言われるようになってしまった。学校を卒業した若者達が、所謂『IT企業』に来たがらない風潮が強くなった。それは大抵の場合、IT化への実装と言う『デリバリー』を担う企業である。勿論、テクノロジーだけでは企業のIT化は成り立たない。実装化作業は大変重要な役割を持つ。この分野でも新しい実装化技術、手法の開発、ベンダーとエンドユーザーの役割分担による効果的実装化の方法を探り、『３K化』からの脱却は必要ではあるが、日本のIT市場に芽生えて来た新しい萌芽に注目したい。インターネットは企業、団体、国家を超えた、グローバルなICTインフラとなりつつある。これに纏わる新しいテクノロジーは全て米国発と思われて来た。今や中国が、インドがプレイヤーとしてテクノロジー開発、利用技術開発に参画して来る。日本も例外ではない。90年代以降、新興してきた「非エ系」と呼ばれているベンチャー企業がITの表舞台に登場してくる。新しいIT人材の台頭である。新しいITの歴史が作られつつあると実感する。若い人たちに、ITは決して『３K』市場だけではない事をメッセージしたい。

2007年も後僅か、そしての想い

可児 重昭（８回生）

「2007年」という今年については、何かと節目の年でもあった。我が母校「多北高」を卒業して、早や40年を経過した。来年2008年の秋には、第２回目「８回生学年同窓会」が多治見で開催される予定で、事務局として準備を行っている同じ（可児）中部中学校～「多北高」卒の友人と、今夏帰岐の折、可児市で会った。今や、新宿⇔可児市直行夜行バス便があり、中央高速経由で中津川から一般道に降りたり昇ったりでの、瑞浪～土岐～多治見、そして可児市を結び、往復8,780円と安価で便利に行き来出来るようになった。

ちなみに、姉に多治見へ車で連れて行って貰い、「多北高」新校舎を外から拝見し、解放されていた懐かしい修道院にも初めて入った。主目的は、お土産買入だった。美濃焼きの陶器に入ったプリン詰合わせセットをクール宅急便で自宅へ送った。話が逸れてしまったが、来年か再来年の「北辰TOKYO」には、是非共、この第２回目「８回生学年同窓会」の様子をレポートしようと思っている。

さて、本題に入らなければならない。「2007年」という今年については、先ずは「2007年問題」、つまり、昭和21～24年に誕生した「団塊の世代」の大量定年退職者発生の元年であり、小生も、この世代の一員である。「団塊の世代」とは、戦後のベビーブームに生まれた我々のことをいい、堺屋太一氏が名付けた。この世代にまつわる話題が、各メディアで取上げられることが時々ある。

小生自身の表現に置き換えると、小学校時代は、TV番組「月光仮面＆赤胴鈴之助」に象徴される「正義の味方」世代、中学校時代は高度経済成長期で、「若者たち＆若大将＆エレキブーム＆ビートルズ＆舟木一夫ご三家」世代、高校時代は、受験戦争に揉まれての大学進学期で、TV番組「逃亡者＆コンバット＆ひょっこりひょうたん島、そして、カレッジ フォーク＆ポップス」世代、大学時代は、大学紛争の延長線上で「寅さんシリーズ＆いちご白書＆卒業＆サイモンとガーファンクル」世代でオイルショックも体験した。

社会人としては、受験戦争同様、競争の真っ只中に居たり、バブルとその崩壊、ニートやフリーターやリストラという言葉に象徴されてきた「就職氷河期」、その後、「ワーキングプア」とか「弱者切捨て」とか「格差社会」とかという言葉を生み出した時代、やや持ち直してきたとはいえ、果たして本当にそうなのか、その後、実感の伴わない「ゆるやかな経済成長？」の中を生き抜いてきた世代である。

2001年といえば小渕～森政権を引継いだ小泉政権誕生の年、全ての世代にとっては「就職氷河期」、「インフレ」と「リストラ」の時代を垣間見、雇用構造も激変した。その後の経済はやや上向き、雇用環境の改善もあるとの見解が示されてはいる。安倍政権へ引き継がれても、経済社会問題、国民と直結したところでは、年金問題や税と国保負担増等、「弱者切捨て」「格差社会」に象徴される問題は、継続して残され、参院戦では、国会自体が「ねじれ現象」、内閣改造、臨時国会召集、所信表明演説直後、代表質問直前での辞任劇と入院、ポスト安倍の話が派閥抗争の泥試合の中で露呈展開、誰が如何にこの日本の危機？を建直し、良き指導者と成り得るかどうかが、大きな鍵となってしまっている。政局の変化については、全く不透明である。(09/17記)

2007年については、小生の母校（大学）創設125周年という節目の年でもある。

春のリーグ戦では、話題投手達の活躍もあって制覇出来た。社会人になっては、むしろずーっと母校のラグビー観戦にはまっていたが、暫く振りで神宮球場へ何度も足を運び、応援団に頼んで外野席よりは安い学生席に陣取って、現役学生時代には体験したことの無い「東大戦」や他大学戦も観戦した。10月21日は「125周年記念日」、いよいよ秋のリーグ戦もまた話題投手の開幕「東大戦」先発で開幕勝利した。是非共連続制覇して欲しいと楽しみにしている。2008年には、先ずは箱根駅伝での制覇、そして、ラグビーでも、大学選手権と日本選手権、つまり、大学と社会人の制覇に期待している。

2008年は、母校「多北高」（高校）の創立50周年の年でもある。今後の益々の発展に期待したい。

第17回総会・懇親会のご報告

多治見北高校同窓会東京支部の総会・懇親会は、昨年11月18日午後3時から東京・三軒茶屋の昭和女子大学で開催されました。今回で第17回を数える総会・フォーラム・懇親会は7回生、17回生、27回生の年度幹事が中心となって準備・運営にあたりました。地元から同窓会本部の尾関恵一会長、母校の勝安喜校長、恩師の松田嘉久先生らの来賓を迎え、約90人の参加者が旧交を温めました。

総会では第16期の事業報告・決算報告・会計監査報告、第17期事業計画・予算案が承認されました。さらに新たに役員として副会長に小島富美子さんが選出され次期総会・懇親会にむけての態勢の強化が確認されました。

東京支部恒例のフォーラムでは、まず、鈴木一夫氏（17回生・（株）シンプレクス・インベストメント・アドバイザーズ 常勤監査役）が「投資?!のミステリー」と題して講演。長銀出身で現役のファンド運用会社監査役が、自らの投資体験を交えながら語る話は、参加者にとってもおおいに興味深い内容でした。

続いて、「髪は生きている？長～い友達」と題して、安藤敏弘氏（17回生・NPO法人 日本弱酸性美容協会常務理事 山崎伊久江美容研究会本部講師）が登壇。マイクロスコープで実際の頭皮を撮影・投影しながら、皮膚にとっての中性はph5.5あたりの弱酸性であることから、正しい弱酸性のヘアケア法が髪を健やかに保つ上できわめて大切と説かれ、一同おおいに納得しました。

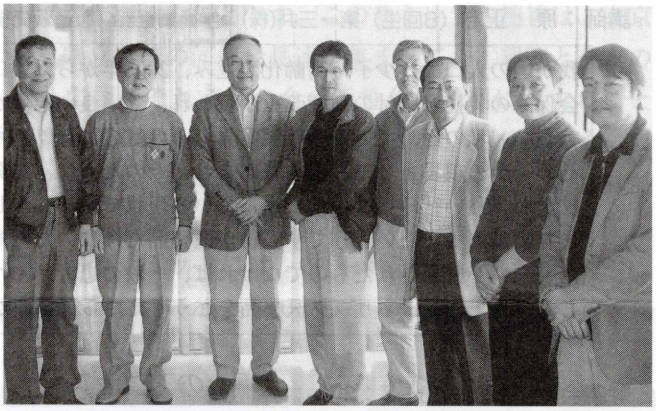
大会議室に移動しての懇親会は、前原金一東京支部会長の開会の辞に続いて、勝校長、尾関本部同窓会長ら来賓が挨拶。乾杯を合図に、各々なごやかな歓談へと移りました。新卒の46回生も交え各年代の相互交流も活発に行われ、東濃弁も飛び交う和気あいあいの懇親会となりました。予定の2時間はあっという間に過ぎ、シンボルの「キューピー」を受け渡しての幹事団引継セレモニー、全員での校歌斉唱の後、小栗英夫東京支部副会長の閉会の辞でお開きとなりました。

東京支部懇親ゴルフ会開催

3月17日(土)、大宮カントリークラブ（埼玉県）にて「第3回東京支部懇親ゴルフ会」が開催されました。

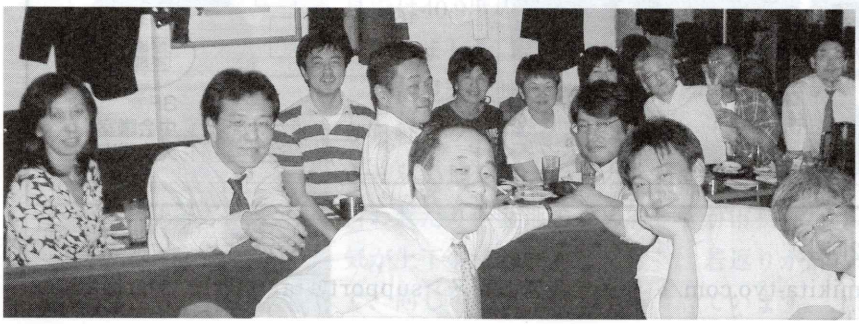
初心者からベテランまで、8人が参加。ほとんどが一緒に回るのは初めてという組み合わせのメンバーたちでしたが、そこは同窓生同士。好天にも恵まれ、終始和気藹々のゴルフ会でした。

第4回は、10月21日（日）、チェックメイトカントリークラブ（神奈川県）で開催。年2回程度の開催を予定していますので、ぜひ次回、次々回へのご参加をお誘い申し上げます。



＜写真は参加者一同、左から中嶋正人（2回生）、大地秀生（6回生）、鈴木清二（13回生）、原田英明（12回生）、伊藤昌樹（6回生）、前原金一（2回生）、小池孝範（12回生）、安藤敏弘（17回生）敬称略＞

渋谷で定例飲み会やってます



多北の同窓生が集まって、2～3ヶ月に1回のペースでやっている飲み会があります。この日5月24日は、昨年の総会・懇親会の幹事回生を務めた17回生を中心に十数名が集まりました。渋谷の「nob」という店が定宿になっていて、地下の店内はほぼ貸し切り状態でした。特に年齢制限はなく、幅広い世代の同窓生が入れ替わり立ち替わり集まっています。

第18回東京支部総会・懇親会のご案内

会員の皆様には益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。平素は支部運営にご協力いただき御礼申し上げます。
今年の夏は74年ぶりに40.9℃と観測史上最高気温を多治見市で更新し（残念ながら単独ではなく、熊谷市と同記録）、何かと話題の多い年となりました。
さて、本年も東京支部懇親会を下記の通り開催する運びとなりました。ご多用中のこととは存じますが同期の方々とお誘い合わせのうえ、是非ご出席くださるようご案内申し上げます。

多治見北高同窓会東京支部総会実行委員会（8、18、28、38回生）

記

日時：平成19年11月17日（土曜日）　午後３時～７時45分（２時30分開場）
会場：昭和女子大学　本部館３階　電話　03（3411）5244（内線1301）（当日のみ）
　　総会・フォーラム：中会議室　懇親会：大会議室　なお、会場までの道筋は、案内図をご覧ください。

＜プログラム＞
・受付開始：午後2：30
・総　　会：午後3：00～3：30（於：中会議室）　議長選出、活動報告、会計報告、新役員選出、その他
・フォーラム：午後3：30～4：30（於：中会議室）
　演題：ITは私達の生活をどのように変えるか？（仮題）
　講師：萱原　昇（8回生）トーテックアメニティ株式会社　取締役常務執行役員（社長補佐）　（5ページに寄稿していただいています）

1960年代に大手企業の個別業務の機械化と言うテーマで始まったコンピュータ化の歴史は、企業の経営資源を支えるインフラとして発展し、やがて企業を超えた、業界全体の経営効率化ツールとして進化してきた。一方で、'90年代半ばから普及し始めたインターネットは『個』の時代の到来をもたらし、時間と距離を超えたグローバルな社会インフラとして自己増殖して行く。いつの間にか、コンピュータは『IT』と呼ばれるようになったが、インターネットに代表される今日的ITは単なる技術革新の進化系だけでなく、文化を、慣習を、さらに人間の意識をも変革させて行く。今回は、コンピュータ～ITへの進化する歴史を振り返り、社会インフラとなった今日的ITが私達の生活とどのように関わり、それを支えてくれるのか、限られた時間の中で紹介してみたい。

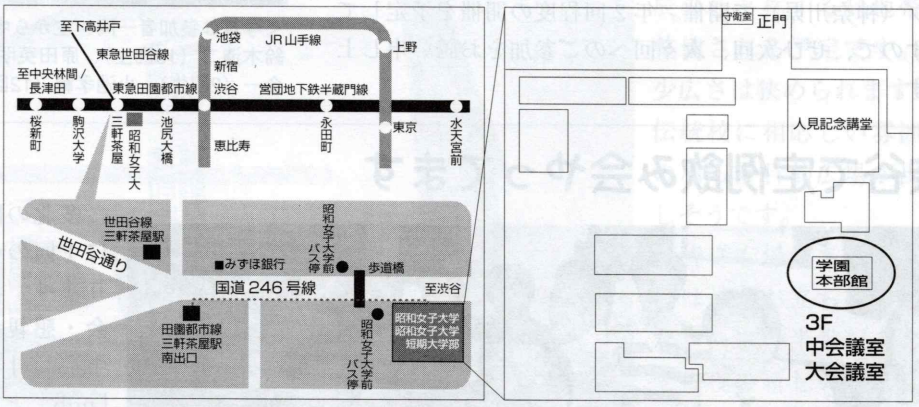
　演題：ジェネリック医薬品を考える
　講師：原　正志（8回生）第一三共(株)　学術調査部　製造販売後調査の推進担当

我が国の人口は、少子・高齢化が進み、2005年からは人口減少局面に入りました。社会構造の変化から、様々な形で社会保障の負担と給付の制度改正が行われ、効率良い運用が余儀なくされています。医療分野も、その最たる問題を含んでおり、私の勤めている医薬品業界もその対応に日々エネルギーを費やしている現状です。医療費を効率よく運用するその一つの項目として、薬剤費があり、そのために、先発医薬品ではなく、安価な後発のジェネリック医薬品の普及・拡大が、強い行政指導の下で進んでいる現状です。しかしながら、欧米と比較してその進捗の程度は低く、本邦ではあまり馴染んでいないようです。物が医薬品だけに、ただ単純に「安かろう」だけでは納得性に乏しく、確実な効果、また安全性が確保されたものでなければ、一般の患者さんへの理解は進まないと考えます。そこで、医薬品の特性を考慮したうえで、ジェネリック医薬品をどう考えたらよいのか、みなさんへの情報提供としたいと考えます。

・懇親会：午後5：00～7：30
　（於：大会議室）
・懇親会費：一般6,000円
　　学生1,000円
　（新卒業生は無料）
・年会費：一般2,000円 学生0円

当日、会場での展示品を募集します。ご希望の方は実行委員会まで事前にご連絡下さい。

会場へのアクセス



編集委員　小栗英夫（2回生）、原田英明（12回生）
＜ホームページアドレス＞http://www.tajimikita-tyo.com/　＜メールアドレス＞support@tajimikita-tyo.com